◆ キーワード　松尾芭蕉／句碑／在地伝承／別伝句／俳人集団

松尾芭蕉別伝句の在地伝承化と句碑建立
―現存する芭蕉別伝句句碑を基にして―

玉水　洋匡

はじめに

平成十八年（二〇〇六）四月二十八日、『中日新聞』の西濃版の朝刊に「芭蕉と木因の句碑除幕　垂井・綾戸古墳　『物見の松』詠む」という記事が掲載された。[1] 記事によると、「芭蕉は奥の細道などで、美濃の城下町大垣をしばしば訪れており、大垣の船問屋だった谷木因とは兄弟弟子の間柄だった。不破郡史によると、垂井を訪れた芭蕉らが、木に登って旅人を待ち構えたとされる熊坂長範の伝説を基にこの句を詠んだ」とある。[2] 確かに文化二年（一八〇五）に秋里籬島が編纂した『木曽路名所図会』巻之二には、同地の「幣懸松」の項に句碑に刻まれた松尾芭蕉の句「わる暑く吹や一ト木の松の音」と谷木因の句が掲載されている。[3] 一方で明和八年（一七七一）に出された『去来発句集』には「わるあつく吹や人見の松の風」という句が、「美濃の国熊坂か人見の松にて」という前書とともに掲載されている。[4] つまり「わる暑く」の句は松尾芭蕉が詠んだという伝承と、向井去来が詠んだという伝承と存在しているのである。

このように松尾芭蕉詠と伝えられた句でありながら、他の人物が詠んだとも考えられている句が「松尾芭蕉別伝句」である。「松尾芭蕉別伝句」は二百句あまり存在し、「松尾芭蕉別伝句」を句碑に刻み、松尾芭蕉がその句を詠んだと伝えている地域が複数存在している。しかも江戸時代に建立された句碑を大切に保存している地域ばかりではなく、二〇〇〇年代以降の現代においても「松尾芭蕉別伝句」を基に句碑が建立されている。こうして「松尾芭蕉別伝句」を松尾芭蕉が詠んだと信じ、語り伝えている地域があることは、口承文芸研究上注目すべきことであると考える。

本稿では松尾芭蕉が詠んだと伝承されながら、他の人物が詠んだと推測されている句を刻んだ句碑を対象とし、句碑建立の状況や現在の句碑のあり方を踏まえ、「松尾芭蕉別伝句」伝承を考察していきたい。「松尾芭蕉別伝句」の伝承とそれに伴う句碑

の存在を分析することで、口承文芸研究の一領域として、当該地域の俳人集団である「連」や「社」において、「松尾芭蕉別伝句」が当該地域に定着し、「松尾芭蕉別伝句」が権威づけられていった筋道を明らかにする。

一　松尾芭蕉別伝句に関する先行研究

江戸時代に出版された松尾芭蕉の句を集めた書籍の中には、「別伝句」を少なからず含んでいるものもある。ただし「実作句」「別伝句」とは明確に分けられておらず、混在している状況である。各務支考が松尾芭蕉の死の直後である元禄八年（一六九五）にまとめた『笈日記』にはすでに「別伝句」が掲載されている。[5] また風国が元禄十一年（一六九八）にまとめた『泊船集』には、「芭蕉庵拾遺稿」として松尾芭蕉の発句が集められている。ここにも「別伝句」がみられる。[6] 以後同じ傾向が、江戸時代では続いていく。管見の限り、「別伝句」を明確に他の句と区別し、別な作者についても記している最初の松尾芭蕉句集は、花の本秀三と月の本素水が明治二十四（一八九一）にまとめた『纂註芭蕉翁一代集』である。[7]

また江戸時代にはさまざまな随筆にも、松尾芭蕉に関する記述が見られる。その中に「別伝句」が取り上げられていることもある。編者や編年不明の『元禄宝永珍話』巻一には次のようにある。

元禄七戌年十月十二日、俳人芭蕉翁卒、年五十一、江州粟津義仲寺葬るなり、
芭蕉翁俗名を松尾忠左衛門と云、伊賀上野藤堂家之近臣なり、（中略）其吟に、
　船となり帆となる風のばせうかな
伯船堂、無名庵、蓑虫庵、瓢中庵の諸号あり、初め名を宗房といへり、[8]

この「船となり帆となる風のばせうかな」は先述した『泊船集』には松尾芭蕉の句として取り上げられているものの、「此句翁の製なりとある人申されし實否はしらず」とされている。[9] 一方元禄五年（一六九二）に、片山助叟が編集した『誹諧釿始』には芳賀一晶の句として掲載されている。[10] つまりこの句もまた「別伝句」の一つなのである。

さらに江戸時代後期に成立したとされる『芭蕉翁行脚怪談袋』の中にも別伝句は登場している。「芭蕉翁浪華の旅窓に客死　附門人追善一句の事」では、亡くなったはずの芭蕉が其角の夢に迷い出て「木曽殿とうしろ合の夜寒かな」という句を遺す。[11] この句は各務支考によって編まれた『葛の松原』では伊勢の又玄の句とされ、「木曽殿と背あはする夜寒哉」とある。[12] 伊藤龍平もこの点を指摘するとともに、『芭蕉翁行脚怪談袋』の中で「別伝句」について考察を加えている。[13]

したがって「別伝句」に限って言えば、少しずつ個別に研究は進められているものの、その解明はほとんど進んでいってい

ないと言っていい。改めて「別伝句」の検証が必要とされていると考える。

二　「松尾芭蕉別伝句碑」の現地調査からの検証

本節では具体的に「松尾芭蕉別伝句碑」の周辺から伝承を探っていきたい。現地調査を行なうことができた三つの地域の事例を検証していくことにする。

①　埼玉県熊谷市弥藤吾　観清寺の松尾芭蕉別伝句碑

熊谷市にはさまざまな松尾芭蕉句碑が建立されているが、「松尾芭蕉別伝句碑」は観清寺にある「雪といふ物かあるそ今年竹」という一基だけである。この句碑は昭和十年（一九三五）に建立されたものである。令和三年（二〇二一）三月五日に現地を訪れ、熊谷市立江南文化財センター学芸員の山下祐樹さんからお話を伺った。山下祐樹さんは「熊谷句碑物語」というリーフレットをまとめたり、地元熊谷においてさまざまな文化財研究をしたりしている方である。山下祐樹さんによればこの句は松尾芭蕉の真筆ではなく、天保期に活躍した桜井梅室のものであると考えられるという。しかしながら地元熊谷では長らく松尾芭蕉詠句とされ、現在においても松尾芭蕉詠句と信じられているという。そこで「熊谷句碑物語」においても、別伝句である可能性には触れず、「芭蕉38歳過ぎの句と推定されますが、句の出典は不明です。」と紹介するに留められている。[14] 現在のところ、松尾芭蕉が詠んだという出典は確認できていないが、天保十年（一八三九）に出版された『梅室家集』上「夏之部」「今年竹」にはこの句が記載されている。[15] 天保十年（一八三九）から昭和十年（一九三五）の間に、この句は桜井梅室から松尾芭蕉が詠んだものと変化したのであろう。

「雪といふ」の句が松尾芭蕉詠句だと伝承されるようになったのには幾つかの要因が考えられる。一つ目は桜井梅室自身があちこちで松尾芭蕉句碑の作成に関わっていたことである。桜井梅室自身は金沢の人であるが、北は東北から南は九州まで松尾芭蕉句碑に刻む文字の筆を執っている。熊谷においても、慶応四年（一八六八）に建立された「雉子塚の碑」には桜井梅室の句が冒頭に刻まれている。[16] つまり熊谷地域において桜井梅室は非常に縁の深い人物だったと言えるのである。二つ目は妻沼聖天山を中心とする俳人集団の存在である。文化九年（一八一二）に妻沼聖天山に松尾芭蕉句碑「稲妻や　闇のかた行　五位の声」を建立したうちの一人、代定吉は建部巣兆門下であり、五渡の俳号を名のり、息子に家業と五渡の俳号を譲ってからは五翁と号した。[17] なおこの文化九年の松尾芭蕉句碑の裏面には師匠である建部巣兆の撰文が刻まれ、書を揮毫したのは太田南畝という豪華な顔ぶれとなっている。[18] また内田五八九は成田蒼虬の門下で皓々処の号を授かり、安政四年（一八五七）に熊谷に戻ってからは日永庵と称し後進の指導に当たっていた。[19] 明治期以降は、押田文岱が内田五八九の甥である内田朴山を社主として、明治

二十一年（一八八八）に「水音盟書社」を立ち上げた。[20] このように熊谷には中央で学んだ人物を中心とする俳人集団が存在していたのである。また別伝句碑が建立されている観清寺は、現在でも地元の人々にとって重要な菩提寺となっている。しかも明治期にはここに小学校が置かれていたという。ここに別伝句碑が建立される素地が揃っていたと言えるだろう。

② 神奈川県横須賀市東浦賀町　叶神社の松尾芭蕉別伝句碑

浦賀には浦賀港を挟んで西浦賀町と東浦賀町にそれぞれ叶神社がある。令和三年（二〇二一）五月三日に両方の叶神社を訪れた。まず西浦賀町の叶神社を参詣し宮司さんに松尾芭蕉句碑のことを伺った。東浦賀町にある叶神社とは宮司が違うが松尾芭蕉句碑があるということを聞いたことがないとのことであった。続いて「浦賀の渡し」を渡って東浦賀町の叶神社を参詣した。本殿前の階段下には境内の案内板が置かれており松尾芭蕉句碑も案内板に掲載されていた。松尾芭蕉句碑は奥社に通じる道の途中に置かれていた。松尾芭蕉句碑には「丹よ起丹よ起と帆はし良寒き入江哉」の句が刻まれ、碑の前面上部には「正風宗子之碑」と掘られていた。宮司さんにお話を伺うと、句碑は松尾芭蕉の弟子であった福井貞斎が建立し、その後ずっと同じ場所にあるのだという。松尾芭蕉が浦賀に来た際に、叶神社の本殿から湾を見て詠んだものだとおっしゃっていた。東浦賀町には舟番所が置かれており、にぎやかだったそうである。

建立者である福井貞斎については、彼の墓がある専福寺に記述がある。

東叶神社の芭蕉碑を建てた、福井貞斎の墓があります。貞斎は、相浦社という俳諧（連句・俳句の総称）の結社を作っていたようで、当時、浦賀で俳諧がいかに盛んであったかがうかがわれます。明治3年に没しました。

墓石には、「達磨忌の大根膾や摺りはなし」という辞世の句と、「何事もよしやあし屋にさはがしの世をのがれて行身こそ楽しき」という狂歌が刻まれています。[21]

なぜ東浦賀町の叶神社に句碑を建立したのか。なぜ北村湖春の句が松尾芭蕉詠句と伝承されたのか。これらのことは現在調査中であり判明していないが、少なくとも福井貞斎と相浦社そして東浦賀町の叶神社が伝承に大きく関与していることは間違いない。ちなみに『芭蕉俳句集』によれば、元禄九年（一六九六）に出された遊林による『反故集』には松尾芭蕉作とあり、元禄十年（一六九七）に出された挙堂による『真木柱』には北村湖春作とあるという。[22]

③ 山梨県甲州市勝沼町　勝沼ぶどう郷駅前・上町小公園・大善寺の松尾芭蕉別伝句碑

令和三年（二〇二一）三月十二日に勝沼町を訪ねた。勝沼ぶどう郷駅前に置かれた句碑は正面に「勝沼や馬子もぶどうを食ひながら」と刻まれ、左側面には「芭蕉・伝説」とある。勝沼ぶどう郷駅の観光案内所の方に話を聞くと、この碑はだいぶ前から置かれているということであった。勝沼ぶどう郷駅から旧

勝沼町中心部に行くと、県道二一四号線と県道三四号線が交差する周辺に上町小公園がある。上町小公園の上部にやはり「勝沼や馬子もぶどうを食ひながら」の句碑がある。句碑の脇には「上町小公園伝芭蕉句碑」と書かれた案内板が建てられ、「句は蓮之の作、芭蕉作として早くから誤伝されてきた」と説明されている。さらに勝沼にある大善寺にも同様の句碑がある。大善寺では執事の方にお話を伺った。この句碑を建立したのは大善寺の当代のご住職だという。また上町小公園にある句碑も元々は大善寺に置かれたものだったという。道路の拡張工事のために上町小公園に移建されたのだという。大善寺は甲州葡萄発祥の伝説を有する寺であり、通称「ぶどう寺」と呼ばれているそうである。大善寺の住職が境内で栽培したぶどうを使い、自ら醸造した「ぶどう寺ワイン」も売られていた。松尾芭蕉が勝沼町を訪れたことや、「勝沼や馬子もぶどうを食ひながら」を詠んだということは幼いころから教わるようである。

また大善寺境内にはもう一つ松尾芭蕉句碑が置かれている。「芭蕉翁甲斐塚」と名づけられた句碑は道路を見下ろすように建っている。案内板に書かれていた説明を引用する。

「蛤の生ける甲斐あれ年の暮」芭蕉

この碑は、宝暦十二年（一七六二）十月に藤井村の草々庵梅童（一七〇一～一七八一）が父梅馬の意志を継ぎ建立したもので、合わせて「俳諧甲斐塚集」が選集され、「霜を出て霜より白し塚の月」の梅童の建立句が伝えられている。梅馬（～一七五七）は名を渡辺武右衛門といい、守墨庵柳居や弟子の門瑟と親交があり、蕉門の柳居の流れを甲斐に伝えた先駆者。

また、この碑は県内に数多くある芭蕉句碑の中で最も古いものである。

甲州市教育委員会

このように大善寺周辺では蕉門の一流派が受け継がれ、俳人集団を形成していたと見ることができる。その受け皿としての役割を大善寺は担っていたのである。

「勝沼や」の句が松尾芭蕉詠句だと伝わっていたのは、江戸時代からである。文政十年（一八二七）に何丸が編纂した『芭蕉翁句解大成』には、「勝沢や孫は葡萄を喰ながら」「愚考孫にては聞へず馬士の伝写なるべし甲州路なとの葡萄の名物の地などにての吟なるべけれども未考」とある。[23] ここからは文政年間に「勝沼や」の句が松尾芭蕉詠と伝わっていたことがわかる。明治二十六年（一八九三）に大森快庵らが編纂した『甲斐叢記』「勝沼驛」にも「勝沼や馬子も葡萄を喰ながら　はせを」と掲載されている。[24] 江戸時代後期から明治時代にかけて、当該地域で「勝沼や」の句は松尾芭蕉詠として伝わっていたのである。昭和十一年（一九三六）八月に『山梨日日新聞』で連載された「芭蕉と甲州」でも、野口二郎は「勝沼や」の句が「今日勝沼に口碑として残つている」と述べている。[25]

「勝沼や」の句が松尾芭蕉詠句と伝えられているのは、「等々力の万福寺に一時滞在したという言い伝えが残されて」いるか

らである。[26]『勝沼町誌』には松尾芭蕉勝沼来訪の伝承についてまとめられている。

甲州行は何人を頼りにしたであろうかというと、これには諸説があつてはつきりしない。（中略）第二は初雁村の杉風の姉説である。「芭蕉翁略伝」（湖中撰）に

一説に、甲州の郡内谷村と初雁村とに久しく足をとどめられし事あり、初雁村の等力山万福寺といふ寺に、翁の書れしもの多くあり。又初雁村に杉風が姉ありしといへば、深川の庵焼失の後、かの姉の許へ、杉風より添書など持れて行れしなるべしと云。

とある。ところが右の文中に初狩村の等力山万福寺とあるが、初狩村に万福寺という寺があつた証跡は全くないのである。とすると現勝沼町等々力の等々力山万福寺の誤伝ではないだろうかと考えられて来る。（中略）

第二回目の入峡は貞享二年夏四月のことである。野晒紀行の帰途、「思ひ立つ木曽や四月の桜狩」と熱田で吟じて、木曽に出で、いずれの道を経たか不明であるが、再び甲斐を訪れている。（中略）

第二回目の入峡が木曽から塩尻・諏訪を経て甲斐に入つたとすると勝沼の地をも通過したことになるかもしれない。[27]

このように、松尾芭蕉勝沼来訪伝承と伝・松尾芭蕉詠句が結びついている。一方で文化八年（一八一一）に白芹が編纂した『青ひさご』には、「勝沼や」の句の作者は「蓮之」となっている。[28]「蓮之」とは杉山杉風の弟子の松木蓮之だと考えられている。[29]松木蓮之の父青雲は甲州出身であり、蓮之自身も度々甲府を訪れていたようである。この時の蓮之詠句が、勝沼を訪れたと信じられていた松尾芭蕉詠句とされたのだとも考えられている。[30]

ここまで現地調査を行なうことができた三地域において、現存する「松尾芭蕉別伝句句碑」を基にして、「松尾芭蕉別伝句」が在地伝承化していく過程と句碑建立が果たした役割を考察してきた。句碑以外の典拠の有無や当該地域における「松尾芭蕉来訪伝承」の有無など、三地域における状況は異なっている。しかしながら、句碑に刻まれた「松尾芭蕉別伝句」が口碑として伝わっている点は共通している。また三地域とも句碑建立地周辺において、松尾芭蕉の流れをくむ俳人集団が存在していたことも共通している。当該地域の俳人集団が、当該の「松尾芭蕉別伝句」を伝承していたという明確な「証拠」は今のところ存在していない。しかしながら松尾芭蕉詠句と伝承された句が地元の俳人集団によって「在地伝承化」されてきたということは考えられる。そして「松尾芭蕉の伝承」の証として別伝句の句碑は建立されてきたのである。さらに現在、研究成果として別の作者が分かってきているものの、当該地域においては松尾芭蕉詠句という伝承は生き続けているのである。

三　「松尾芭蕉別伝句碑」の全国分布からの検証

現地調査できたのは三地域にすぎないが「松尾芭蕉別伝句碑」は日本各地に建立されている。本節では「松尾芭蕉別伝句碑」の分布や事例比較を通して考察していきたい。別伝句碑の確定については、Ⓐ『石に刻まれた芭蕉』に記載されている別伝句碑、Ⓑ『新訂増補　全国文学碑総覧』に記載されている別伝句碑、Ⓒ筆者が現地調査により見つけた別伝句碑、Ⓓ新聞記事に掲載された最近建立された別伝句碑を典拠とした。[31] これらの「松尾芭蕉別伝句碑」を事例とし、次の観点に基づいて表Ⅰ「松尾芭蕉別伝句碑一覧」にまとめた。観点は①所在地②建立地③句④建立年⑤別の作者⑥典拠の六つである。表Ⅰを基にしながら事例を比較し、口承文芸研究としての視点で松尾芭蕉句碑がどのように捉えられるのか考察していく。

①「所在地」からの考察

①の「所在地」は「松尾芭蕉別伝句碑」がどの地域にあるのかをまとめたものである。「所在地」に注目すると、北海道・沖縄県を除く地域に存在している。その中でも関東・甲信越地方に多く見られる。東海や中国地方には数例ずつ存在しており、東北や九州には一例ずつ、近畿や四国には二例ずつしか存在していない。特に甲信越地方に多く見られるのは、別伝句以外の松尾芭蕉句碑でも同様である。別伝句碑の分布は、必ずしも松尾芭蕉来訪伝承と結びついているわけではない。共通点としては、前述したように句碑に刻まれた松尾芭蕉別伝句が口碑として伝わっていること、松尾芭蕉の流れをくむ俳人集団が存在していたことである。

②「建立地」からの考察

②の「建立地」は「松尾芭蕉別伝句碑」が当該地域のどこに置かれているのかをまとめたものである。種別にまとめると寺院が一五例、神社が一二例、個人宅が五例、その他駅や公園などが六例となっている。寺院や神社が大部分を占め、寺院がより多くなっている。これは寺社が身分を越えた集まりである俳人集団の受け皿であったためであると考えられる。もちろん寺社以外でも各地の有力俳人宅で句会は行われている。別伝句碑が置かれている個人宅が当該地域の有力俳人宅であるかどうかは、今後現地調査を行ない明らかにしたいと考えている。駅や公園は建立年代がはっきりとしないものもあるが、後代になって建立されたものである。地元の人々によって元々あったところから移建し整備されたものである。

③「句」からの考察

③の「句」とは句碑にどのような句が刻まれているのかをまとめている。ほとんどの事例は一例ずつ違う句が刻まれており、当該地域の地名や関連するものを詠み込んでいることが多い。「勝沼や馬子もぶどうを食ひながら」は三例あるが、これは「勝沼」という同地域でそれだけ強く伝承されていると考えられる。同じ「松尾芭蕉別伝句」が複数の地域において伝承されている

のは次の三つの句である。「もろもろの心柳にまかすへし」は七例、「にょき〳〵と帆はしら寒き入江かな」は四例、「舟となり帆となり風のはせをかな」は二例、現在のところ判明している。「もろもろの心柳にまかすへし」については建立年代、建立者ともに、現在のところ関連性はなく、なぜこのように複数地域において伝承されているのか判明していない。「舟となり帆となり風のはせをかな」については事例が少なく、憶測の域を出ないため、引き続き調査を進めていきたいと考えている。「にょき〳〵と帆はしら寒き入江かな」も事例は少ないが、建立地は海沿いであり、建立されたのは江戸時代後期の松尾芭蕉百回忌から百五十回忌の間であるということは見いだせる。具体的にはまだ考察できていないが、海路による「伝播者」の存在が想定される。仮にこれらの句が伝播されたとして、それを当該地域に取り込み、当該地域の伝承として「在地伝承化」していった存在が想定されるだろう。

また各地域の地史には「松尾芭蕉別伝句」とともに、「松尾芭蕉の伝承」が書かれている場合がある。№1（表Ⅰの番号を参照、以下本章中は同じ）の事例では『刈田郡誌』「七ケ宿村」に次のようにある。

【芭蕉の句碑】湯原東光寺前にあり。長四尺、幅一尺七寸。

そのかみはやつなりけらすさよきぬた。

芭蕉翁初めてこの地を通過したる時は草木生ひ茂れる淋しき寒村なりしが、再度通過の時は開墾事業大いに進み人家も立並べるによりこの句ありしと傳ふ。[32]

『刈田郡誌』が編まれた昭和三年（一九二八）時点では、松尾芭蕉が複数回来訪し、「そのかみは」の句を詠んだという伝承が見てとれる。一方で「そのかみは」の句は後述する公羽が詠んだとする伝承もある。平成に入って同地でまとめられた町おこしの資料には次のようにある。

◆公羽の句碑

「そのかみは　谷地なりけらし　小夜砧」

碑の上部には芭蕉翁と刻まれており、公羽を翁と読み違い当時の人びとが芭蕉の没後１００年忌を記念して建てたと思われます。公羽は、本名を岸本八郎兵衛といい、庄内藩士ですが、松尾芭蕉が鶴岡に滞在したときに芭蕉に入門して以来、芭蕉と文通を絶やさず享保4年（１９１９）に亡くなりました。

湯原では江戸時代には多くの文人墨客が宿泊し、村人もその影響を受けて句会なども行われており、文化的な雰囲気を漂わせていました。句碑はそうした人びとが建てたものです。[33]

時代によって伝承が変化している様が、№1の事例からは考察することができる。さらに№10の事例では『寺泊町史』に次のようにある。

元禄二（一六八九）年七月四日、「奥の細道」の旅を続ける芭蕉は弟子の曽良を伴って寺泊を通った。この日、朝早く

弥彦の宿を出た二人は野積の西生寺に立ち寄り、弘智法印に参詣している。『曽良旅日記』によると「四日　快晴　辰の上刻、弥彦を立ち、弘智法印像拝まんとして峠より右へ半道ばかり行く、谷の内、森あり、堂あり、像あり、二、三町行きて最正寺（西生寺）と言う所をノズミ（野積）と言う浜へ出て」とあるから　猴ケ馬場の峠を越えて西生寺、そして弘智即身仏に参詣したことは確かである。芭蕉の弘智法印参拝は、「曽良旅日記」発見前から「芭蕉翁句鑑」によって証明されている。すなわち句鑑には、「コウチ法印の霊地にて」と題して「みな月やから鮭拝む野栖山」と詠まれているのである。この句について研究家の間で「弘智即身仏参詣は七月四日なのに、六月の水無月の季語はおかしい」として疑義をはさむ人もいる。西生寺の案内人は、みな月を文月（七月）に訂正して説明している。しかし、この句は、乾涸びた弘智法印のミイラを乾鮭になぞらえて詠んだものであり、乾鮭と水無月が縁のある語であるから、参詣の期日にとらわれず、句としてはこの方がふさわしいとする向きもある。[34]

ここでも「松尾芭蕉別伝句」と「松尾芭蕉来訪伝承」が結びついている。一方で青柳清作は「此の句が果して芭蕉翁の句であるか否やの点について疑うものである。或は支考の句の誤伝ではあるまいか」と述べている。[35] No.10の句もまた別な作者、ここでは各務支考詠句の伝承もあることがわかる。また『寺泊町史』にあったように、句碑の碑面は『芭蕉翁句鑑』の句とは違う形で彫られているという点も注目される。

④「建立年」からの考察

④の「建立年」とは句碑がいつ建立されたのかということをまとめている。年代未詳については参考にした書籍に明記されておらず、現地調査を済ませていない事例である。「建立年」からわかることは次の二つである。一つ目は最初に「松尾芭蕉別伝句碑」が建立されたのが判明している限りでは、松尾芭蕉の百回忌の寛政五年（一七九三）である。句を伝承するためにはある程度の時間を有するということの証左であろう。二つ目は二〇〇〇年代に入ってもなお、「松尾芭蕉別伝句碑」は建立されているということである。研究成果が発表され、当該地域で伝承されていた松尾芭蕉詠句が別伝句であると判明すると、「芭蕉」の文字をセメントで塗りつぶしたり、句碑そのものを撤去したりしてしまう。「誤伝」していることを「悪」と考え、これまでの伝承をなかったことにしてしまう傾向はしばしばある。看板を新たに設置し、松尾芭蕉の句だと伝承してきた経緯や別の作者の句碑であることを説明する地域もある。その一方でそうした研究成果を知りながらも、当該地域の伝承を守り続けている地域もある。

⑤「別の作者」からの考察

⑤の「別の作者」とは句碑に刻まれた句の作者として、松尾芭蕉以外に伝承されている人物をまとめている。松尾芭蕉とと

もに伝承される人物として多いのは、蕉門十哲を始めとする直弟子たちである。その中でも向井去来が別々の句で三例と最も多い。なお№1で出てくる岸本公羽は松尾芭蕉の生前から混同されていたようである。各務支考の代筆による松尾芭蕉の遺言状には、「羽州岸本八郎右衛門發句二句、炭俵に拙者句になり、公羽と翁との紛れにて可レ有レ之、杉風より急度御斷可給候。」[36]とある。縦書きであるがために、「公羽」と松尾芭蕉を指す「翁」が混同されたと松尾芭蕉自身が述べているのだ。直弟子以外にも、孫弟子にあたる松木蓮之や、松尾芭蕉の血縁者とも言われる天野桃隣、松尾芭蕉の兄弟子に当たる北村湖春といった人物とも伝承されている。また松尾芭蕉の死後に活躍した俳諧師たちも対象となっている。№6の桜井梅室や№18の高桑闌更は蕉門俳人とはいえ、江戸時代の中期から後期にかけて活躍した人物である。また№22の飯尾宗祇は松尾芭蕉以前の人物だが、伊藤龍平によれば「宗祇説話の後継者にふさわしいのは芭蕉であるという暗黙の了解があった」と指摘し、そのため「近世の宗祇説話には、しばしば芭蕉が登場する」という[37]。つまり松尾芭蕉詠句と伝承するにふさわしい人物が選ばれたということになる。

おわりに

「松尾芭蕉別伝句」について、現地調査による成果をまとめ、全国的な分布について考察してきた。しかしながら現地調査できたものはほんの一部であり、そこから得た考察は現時点での限られたものである。当該地域の人々に配慮をしながら、現地調査を進め、俳人集団が伝承を担っていたことを論証していきたい。

本研究は「芭蕉翁伝承句」碑を基にした、伝・芭蕉翁詠句に対する伝承文学的考察を試みた検証の一つである。こうした研究は、和歌説話からの接続を考察した、伊藤龍平の「近世俳諧説話」研究の一翼を担うものである[38]。また句碑建立により松尾芭蕉を祀る点においては、及川祥平が提唱した「偉人崇拝の民俗学」につながるものであると言える[39]。さらに重信幸彦が述べた、兵士の武勇・忠勇を語り「英霊」を顕彰する、兵士を主人公にした「軍事美談」と、松尾芭蕉の偉業を語り「芭蕉」を顕彰する、松尾芭蕉を主人公にした「松尾芭蕉の伝承」も類似する性格を持っていると考えている[40]。今後こうした研究とのつながり、そして俳人集団における「伝承」のあり方を模索していくことにしたい。

註

（1）「芭蕉と木因の句碑除幕　垂井・綾戸古墳『物見の松』詠む」『中日新聞』（西濃版）二〇〇六年四月二十八日。

（2）（1）と同。

（3）秋里籬島『木曾路名所図会』巻之二　一八〇五　西村吉兵衛

早稲田大学蔵。

（4）向井去来『去来発句集』一七七一　出版者不明　早稲田大学蔵。

（5）各務支考『笈日記』上　一六九五　井筒屋　早稲田大学蔵。『笈日記』には「渺〳〵と尻ならべたる田植哉」の句が松尾芭蕉の句として掲載されているが、後に紹介する『泊船集』巻之三には「笈日記に渺〳〵と尻ならへたる田うえ哉と云句を入集いたされけれと是は伊丹の句にて翁の句にあらす」とある。そのため現時点では、「松尾芭蕉実作句」ではなく「別伝句」と考えられる。

（6）伊藤風国『泊船集』巻之四　一六九八　井筒屋　早稲田大学蔵。例えば『泊船集』巻之四に「盆過て宵やみくらし虫の聲」の句が松尾芭蕉の句として掲載されているが、『誹諧草庵集』琴には「盆過の宵闇悲し虫の聲」の句が尼松山の句として掲載されている。『誹諧草庵集』は句空編　一七〇〇　出版者不明　早稲田大学蔵。そのため現時点では、「松尾芭蕉実作句」ではなく、「別伝句」と考えられる。

（7）花の本秀三・月の本素水校注『纂註芭蕉翁一代集』一八九一　今古堂　国立国会図書館蔵。

（8）『元禄宝永珍話』（早川純三郎ら編『近世風俗見聞集』第一一九一二　国書刊行会）。

（9）（6）と同書。

（10）片山助叟『誹諧新始』一六九二　井筒屋（俳文学会編『誹諧新始』未刊連歌俳諧資料　一九六一　自刊）。

（11）『芭蕉翁行脚怪談袋』一八九一　今古堂　国立国会図書館蔵。

（12）各務支考・伊藤不玉『葛の松原』一六九三成立・一八二〇写本　早稲田大学蔵。

（13）伊藤龍平訳・解説『怪談おくのほそ道』二〇一六　国書刊行会。

（14）山下祐樹「熊谷句碑物語―熊谷の歴史を彩る俳句と句碑をめぐる旅―」二〇一八　熊谷学ラボラトリー・熊谷句碑研究会。

（15）桜井梅室『梅室家集』上　一八三九　懐玉堂　早稲田大学蔵。

（16）（14）と同書。

（17）日下部朝一郎『熊谷人物事典』一九八二　国書刊行会。

（18）（14）と同書。

（19）（17）と同書。

（20）（17）と同書。

（21）「横須賀市」閲覧日は二〇二一年五月五日。https://www.city.yokosuka.kanagawa.jp/2490/uraga_walk/higasi7.html

（22）中村俊定校注『芭蕉俳句集』一九七〇　岩波書店。

（23）月院社何丸『芭蕉翁句解大成』秋下　一八三〇　尚古堂　早稲田大学蔵。

（24）大森快庵ら『甲斐叢記』巻之八（甲斐叢書刊行会編『甲斐叢書』六巻　一九七四　第一書房）。

（25）野口二郎「新版夏草甲州道中記　芭蕉と甲州」『山梨日日新聞』一九三六年八月二十七日。この連載のきっかけは次のように書かれている。「この一文は夏草甲州道中の途上、各地で芭蕉翁の句碑を見て、足取り軽い蓑笠道中に一脈の俳味を

覚えた機縁のペンであるが足らざるところの少くないのは誰の咎でもない筆者の未熟ゆゑである」。

(26) 上町小公園案内板より。

(27) 勝沼町誌刊行委員会『勝沼町誌』一九六二　勝沼町役場。

(28) 白芹『青ひさこ』一八一一　東京大学総合図書館知十文庫蔵。

(29) (27) と同書。

(30) (27) と同書。

(31) Ⓐは弘中孝『石に刻まれた芭蕉　全国の芭蕉句碑・塚碑・文学碑・大全集』二〇〇四　智書房。Ⓑは宮澤康造ら『新訂増補　全国文学碑総覧』二〇〇六　日外アソシエーツ。Ⓓは (1) と同書。

(32) 宮城縣刈田郡教育會『刈田郡誌』一九二八　臨川書店。

(33) 湯原地区元気な地域づくり委員会「湯原地区元気な地域づくり計画書」二〇一〇　自刊。

(34) 寺泊町『寺泊町史』通史編上巻　一九九二　自刊。

(35) 青柳清作『寺泊郷土史』一九七九　歴史図書社。

(36) 萩原恭男校注『芭蕉書簡集』一九七六　岩波書店。

(37) 伊藤龍平「芭蕉、風月の額―貴種流離の世間話―」『世間話研究』第一二号　二〇〇二　世間話研究会。

(38) 伊藤龍平『江戸の俳諧説話』二〇〇七　翰林書房。

(39) 及川祥平『偉人崇拝の民俗学』二〇一七　勉誠出版。

(40) 重信幸彦『みんなで戦争　銃後美談と動員のフォークロア』二〇一九　青弓社。

附記

本論文は、令和三年（二〇二一）六月六日に行われた、第四十五回日本口承文芸学会大会でのオンライン発表を加筆・修正したものである。貴重なご意見をいただき、諸先生方に感謝申し上げます。

（たまみず・ひろただ／國學院大學大学院博士課程前期）

表Ⅰ「松尾芭蕉別伝句碑一覧」

	所在地	建立地	句	建立年	別の作者	典拠
1	宮城県刈田郡七ヶ宿町	東光寺	そのかみはやつなりけらしさよきぬた	年代未詳	岸本公羽	A
2	栃木県那須郡那須町湯本	殺生石	飛ふものは雲はかりなり石の上	明治 20 年（1887）頃	麻父	A B
3	栃木県大田原市八塩	八塩観音堂	すまはやな八しほの里になつみつき	年代未詳	天野桃隣	A
4	栃木県芳賀郡益子町塙	春日神社	角力取ならふや秋のから錦	弘化 2 年（1845）	服部嵐雪	B
5	群馬県沼田市下川田町	スポーツパーク川田	うき草やしかも山田の落し水	年代未詳	水田正秀	A B
6	埼玉県熊谷市弥藤吾	観清寺	雪といふ物かあるそ今年竹	昭和 10 年（1935）	桜井梅室	A B
7	東京都青梅市滝ノ上町	常保寺	玉川の水におほれそおみなえし	慶応 3 年（1867）	杉山杉風	A B
8	神奈川県横浜市戸塚区品濃町	白旗神社	もろもろの心柳にまかすへし	年代未詳	岩田涼菟	A B
9	神奈川県横須賀市東浦賀町	東岸　叶神社	丹よ起丹よ起と帆はし良寒き入江哉	天保 14 年（1843）	北村湖春	A B
10	新潟県長岡市寺泊野積	西生寺	文月やからさけおかむのすみ山	平成元年（1989）	各務支考	A B
11	新潟県上越市下荒浜	個人宅	ほとゝきすなくや雲雀を十文字	明治時代（1868 ～ 1912）	向井去来	A B
12	山梨県甲州市塩山上於曽	向嶽寺	諸の古ゝ呂柳に任す遍し	明治 19 年（1886）	岩田涼菟	A B
13	山梨県甲州市勝沼町菱山	勝沼ぶどう郷駅	勝沼や馬子もぶどうを食ひながら	年代未詳	松木蓮之	C
14	山梨県甲州市勝沼町勝沼	上町小公園	勝沼やまこも葡萄をくひなから	昭和 11 年（1936）	松木蓮之	A B
15	山梨県甲州市勝沼町勝沼	大善寺	勝沼や馬子は葡萄を喰ひながら	平成 29 年（2017）	松木蓮之	C
16	山梨県韮崎市藤井町駒井	当麻戸神社	諸のこころ柳にまかすへし	大正 7 年（1918）	岩田涼菟	A B
17	山梨県南巨摩郡富士川町青柳町	道祖神	もろもろの心柳にまかすへし	天保 4 年（1833）	岩田涼菟	A B
18	長野県飯山市安田	横吹赤地蔵尊	横吹や駒もいなゝく雪嵐	年代未詳	高桑闌更	A B
19	長野県中野市南間長瀬	個人宅	舟となり帆となり風のはせをかな	嘉永 7 年（1854）	芳賀一晶	A B
20	長野県千曲市八幡中原	個人宅	をはすてはこゝからゆくかかんこどり	年代未詳	古儀	A B
21	長野県佐久市望月	豊川稲荷神社	駒曳の木曽や出るらん三日の月	年代未詳	向井去来	A
22	長野県諏訪市湖南	善光寺	善光梨寺て月見る今宵かな	年代未詳	飯尾宗祇	B
23	長野県茅野市金沢御狩野	南宮諏訪大明神	いさみたつ鷹引裾るあられ哉	昭和 10 年（1935）推定	里圃	A B
24	長野県伊那市東春近	個人宅	諸々の心柳にまかすべし	昭和 42 年（1967）	岩田涼菟	A B
25	岐阜県不破郡垂井町綾戸	綾戸古墳	わるあつくふくやひと木の松の音	平成 18 年（2006）	向井去来	D
26	静岡県伊豆市原保	妙泉寺	はつきりと有明残る桜哉	元治元年（1864）	山本荷兮	A B
27	静岡県静岡市清水区岡町	福厳寺	今朝ちりし甲斐の落葉や田子の浦	文政 3 年（1820）	菊岡布仙	A B
28	愛知県江南市松竹町八幡	大宝院	大峯やよしのゝを奥を花の果	昭和 49 年（1967）	曽良	A B
29	愛知県名古屋市中区大須	清浄寺	盆過て宵闇くらしむしの聲	寛政 11 年（1799）	尼松山	A B
30	滋賀県高島市新旭町太田	大田神社	もろもろの心柳にまかすへし	明治 22 年（1889）	岩田涼菟	A B
31	京都府京都市右京区嵯峨小倉山小倉町	弘源寺小倉山墓地	野呂の鳥居に蔦もなかりけり	年代未詳	岩田涼菟	B
32	鳥取県倉吉市河原町	小川氏庭園	三日月やはや手にさはる草の露	弘化 4 年（1847）	天野桃隣	A B
33	広島県廿日市市住吉	住吉神社	にょきにょきと帆はしら寒き入江かな	弘化 3 年（1846）	北村湖春	A B
34	山口県山口市小郡下郷東津中	厳島神社	松一葉おちて地にたつ暑さかな	明治 37 年（1904）	木地風律	A B
35	山口県萩市椿東	鶴江台	にょきにょきと帆はしら寒き入江かな	文化 5 年（1808）	北村湖春	A B
36	山口県長門市油谷新別名	八幡人丸神社	にょきにょきと帆はしら寒き入江かな	寛政 5 年（1793）	北村湖春	A B
37	愛媛県今治市大西町山之内	間所神社	もろもろの心柳にまかすへし	明治 42 年（1909）	岩田涼菟	A B
38	大分県宇佐市安心院町東恵良	桂昌寺跡	舟となり帆となる風のはせをかな	年代未詳	芳賀一晶	A

Ⓐ『石に刻まれた芭蕉』に記載されている別伝句碑
Ⓑ『新訂増補　全国文学碑総覧』に記載されている別伝句碑
Ⓒ筆者が現地調査により見つけた別伝句碑
Ⓓ新聞記事に掲載された最近建立された別伝句碑